

## 中部特集記事を終って

中部支部長 松見三郎

愛知、岐阜、三重の3県、さらにはその背後地の北陸をふくめた中部地方は、わが国が貿易の自由化に対処し、国際競争の場でその立場を確保するためにもっとも投資効果の高い地域として脚光をあびている場所である。

とくに愛知、岐阜、三重の3県を主体とした中京地区は木曾、長良、揖斐の木曾3川を中心とした豊富な水資源、関東、関西、北九州などの経済圏には見られない広大な工業適地、あるいは名神、東名の高速道路、東海道新幹線などのいわゆるわが国の交通革命ともいべき交通幹線の出現など、この圏内の将来への発展の見とおし

は非常に明かるいものがある。

しかし開発の実施段階にあたっては種々の問題点が潜在しており、その前途は必ずしも平坦なものではないように思われる。

そこで本号ではこの中京経済圏の問題を取り上げていただいで、河川、道路などを中心とした開発計画を紹介するとともに、関係の各位にお集りをいただいでその問題点についてお話し合いを願ったわけである。とくに座談会で話題に上ったいくつかの問題点は必ずしも当地域だけではなく、全国的な問題でもあるように考えられるので何かのご参考になれば何よりである。

この特集記事の編集を当支部がお手伝いをするために幹事長を中心として編集委員をお願いして作業を進めていただいたのでその労に対して誌上をおかりしてお礼を申し述べる次第である。

## 書 評

### ク ロ ヨ ン 一北アルプス最後の秘境 黒部に挑む世紀の大開発一

梅棹忠夫・冠松次郎・安川茂雄・足立巻一著 実業之日本社刊

実業之日本社がブルー・ガイド・ブラザースと名づけて新たに企画した“自然と人間”シリーズの第1巻として刊行された本書は、本シリーズの先陣を承わるのにまさに好適というべき題材を選んだ。4人の著者の共著とはいえ、足立巻一氏のうけもつ「黒部と人間」が全巻のおよそ $\frac{2}{3}$ の部分を含み、あたかも本書の責を一人で負っている感が強い。冠松次郎氏の「黒部川を探る」は古い手記の再録であり、安川茂雄氏の「黒部横断の先駆者たち」は歴史的角度から黒部を理解する一資料となろうが、梅棹忠夫氏の「クロヨンとわたし」は、それをはしがきと見ればとも角、巻頭をかざるにはいさか半端な文章という気がする。

したがって、事実この書の本命は「黒部と人間」の編で、これが大へん面白く読めるのは足立氏のたくみな文章構成の功であろう。すなわち、前半「文明をさかのぼる」では、黒部川を河口から上流へとさかのぼりつつ、その周辺の風景を写し、開発の歴史を語り、あわせてそれにまつわる人間像を描き出してゆく。このいわば映画的手法によって楽しくなめらかに読み進むうちに、河口から黒部第四発電所にまで到達し、これから後半の「クロヨン」の章に導入される。この章では、まず完成した

クロヨンの姿を紀行文の形で紹介したのち、いわば回想の形式で着工から竣工までの建設の経過とそれにまつわる数多くのエピソードを物語る。それは、読者の理解を助け、興味をもち上げるのにきわめて効果的な手法となっている。あとがきで、足立氏は、クロヨン・ファンとしての情熱をかたむけて本文を記述したと述べているが、いかにもその情熱がクロヨン建設の記録と黒部川開発の人間像を活写して、本書に単なる案内書以上の価値を与えているということができよう。

口絵、文中に風景や工事の写真も豊富、巻末には、黒部湖をめぐる観光登山コース、黒部川開発小史、クロヨン建設日誌、黒部川第四発電所設備概要などの資料がそえられていて、親切かつ便利な新書版。

筆者：足立巻一 前新大阪新聞社社会部長、詩人、評論家  
梅棹忠夫 大阪市立大学助教授  
冠松次郎 日本山岳会々員  
安川茂雄 日本山岳会々員

体裁：新書版 330ページ 定価 300円 1963.10.1 刊  
実業之日本社：東京都中央区銀座西1の3

電 (561) 5121 (代) 振替東京 326 番

【電力中央研究所 千秋信一・記】